事例52

自ら求め、共に考える子
～きめ細やかな実態把握を通して～

金沢市立米丸小学校

1　事例の概要

(1)　研究主題　　自ら求め、共に考える子　～きめ細やかな実態把握を通して～

現代は様々な情報があふれ、日々、激しく変化する時代である。子どもは、この激しい変化に流されることなく、自己の未来を見つめ、思いや夢を自分の力で実現していかなければならない。学習指導要領においても、激しい変化の時代を生きるために、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康と体力」などの「生きる力」の育成が述べられている。これには、子どもが対象と主体的にかかわりながら、自分の見方や考え方を集団の中で磨くことが必要である。また「思いやりの心」も、子どもが自らを律する心をもち、集団の中でかかわり認められることによって育まれるものである。子どもが自己存在感・自己有用感を感じることによって、自分や友達を肯定的にとらえることができ、積極的・主体的に生きることができると考える。やはり学校では、集団を活かして「生きる力」を育成していく必要がある。

本校では、子どもが「生きる力」を身に付けいていくためには、学校教育全体で子どもを育てる必要があると考え、４つの指導委員会が協働して取り組んできた。その結果、少しずつ、自分から動き出す子ども、協力しながらよりよいものを求めて工夫する子どもが増えてきた。しかし全体的にはまだ受け身の状態であり、指示には安心して取り組むが、新しいものを生み出そうとする子どもは一部である。また、話し合いを深める活動が難しいことや全体や他者のために働く意識も十分に育っていないことなど、他者とのかかわりに力を注ぐ必要があると考えた。そこで本年度は、これまでの研究を継承し追究するために、主題『自ら求め、共に考える子』を設定した。

(2)　研究内容

今、教育は激しい変化の中にある。学校教育で担うことが増加し、多くのことを日々の教育活動に取り入れるようになったと感じる。そのために効率よく学ぶことが大切となるが、スピードが上がりすぎると、自分が学んだことを実感しないことが心配される。子どもが自分の学びを実感するには、じっくりと丁寧に学び、「自分はやれば出来る」、「自分ってすごいな」という自己有能感や自己存在感をもたせることが必要である。そのために、学校の教育活動はどう進めるべきかを考えなくてはならない。

私達の教育活動は、目の前の子どもに合っていなければ、本当の「教育」とはいえない。子どもの実態に即して行わなければならないものである。実態を大切にするということはよく耳にするが、しっかりと実態をとらえ、実際の指導に生かしているかは疑問である。

学習面について考えれば、教材が先に用意されている場合もあり、特別活動、生徒指導、健康安全の取り組みも、先に行事予定があったり、教師のこれまで行ってきた経験を優先してしまうこともある。また、学習集団についても漠然としたイメージでとらえていることもある。もう一度、子どもの実態とは何かについて考える必要がある。広く考えれば、子ども自身を取り巻く生活すべてだと考えられる。しかし、それらを全て考慮して授業を組むのは、現実的に不可能である。そこで私達は、教師として子どもの実態を教師集団で熱く語る機会をもち、そこから指導の具体的な見通しを持ち、子どもにじっくりと丁寧に学ばせたいと考えた。そこで、学習指導、特別活動、健康安全、生徒指導の各指導委員会ごとに、実態把握を細やかにおこない、それをもとにした指導を通して主題にせまることにした。

Ａ－１　学校研究の構造

２　実践の内容　※テーマ「確かな学力」のため、学習指導を抜粋

(1)　授業研究の進め方

「きめ細やかに実態把握」をもとにして，指導者の授業への思いを「私の仮説」に表し，授業研究に努めた。

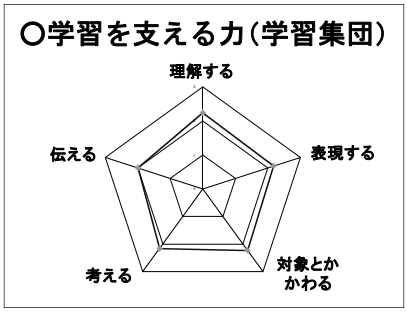
① きめ細やかな実態把握

子どもの実態をきめ細やかに把握するために、「学習を支える力（学習履歴）」と教科の「レディネス」の２つから明らかにすることによって、授業づくりに生かすことを考えた。

ア 学習を支える力（学習履歴）について

本校の子どもに、不足し、必要だと考えられる事柄を整理・分類し、学習に生きる力を下表の５つの面から、一人一人の子どもについて定期的に蓄積し、レーダーチャートに表し、授業づくりの基礎データとして生かすことを考えた。

○理解する	・表していることを正しく理解できる
○表現する	・自分の思いを表現できる
○対象とかかわる	・ねばり強く，対象とかかわることができる
○考える	・自分の考えを創ることができる
○伝える	・相手に分かりやすく伝えることができる



イ レディネス（教科等の子どもの実態）

子どものレディネスを明らかにすることは、必要不可欠なものである。これまでの既習事項の定着や子ども達の経験などを子どもの行動観察、レディネステストを通して行った。

② 私の仮説について

「学習履歴」と「レディネス」によって把握した子どもの実態をもとに、教師がめざす授業づくりの思いを端的に表したものが「私の仮説」であり、授業研究の視点として授業整理会でのポイントとなるものである。また、個々の教師の仮説を検証・蓄積し、教師集団で共有することで、本校の授業の改善を図るものでもある。

○私の仮説　○○（方法）をすれば、□□（目標）ができるであろう

３　指導の実際

第６学年　　算　数　　「およその面積を求めよう」

Ｃ－１ 指導法の工夫、指導案検討会　**Ｃ－２ 単元・評価計画、本時案**

Ｃ－３ 研究授業の様子

４　成果と課題

(1)　成果

① 子どもの実態を、これまでより細かに把握し、授業づくりに生かすことができた。

② 「私の仮説」によって指導者の思いが現れた授業づくりができた。

③ 子どもの学ぶ意欲を高めるために、単元展開の工夫に努めた。

④ 学習に使うもの（素材、活動等）を取り上げたことで、実践的指な指導を考えることができた。

⑤ 学習指導について、必要なもの（解決のための技能・方法、見通し、素材、肯定的な評価等）の価値を再確認することができた。

(2)　課題

① 「学習を支える力」だけでは、子どもの実態を十分に表しきれず、改善が必要である。

② 「私の仮説」の表記について共通理解する必要がある。

③ 子どもが自分で考え、問題を解決できるように、支援の内容を具体化する。

④ 学習におけるかかわりを生かすために、学び合う集団づくりや指導技術を身に付ける必要がある。